

実践事例.02

全校を挙げたソーシャルスキル教育（SST）。  
教師の働きかけも変化して  
日頃の授業態度や生活にも浸透する

長野県立白田高校

人間関係が上手に築けない  
その改善に向けたSST

長野県立白田高校は100年以上の歴史ある高校だが、少子化の影響などで、普通科2クラス、専門科2クラスにまで学校規模が縮小していた。県の高校再編もあり、2015年度4月には総合技術高校として新たにスタートを切る予定となっている。

そんな同校では、本人はそんなつもりで発言したわけではないのに違つて受け取られてトラブルに……など、生徒のコミュニケーションや人間関係づくりに課題があったという。

「そこで09年度に、法政大学文学部心理学教室の渡辺弥生教授と共に、新たにソーシャルスキル教育（SST）を進めることになりました。当時は、教頭を中心に1年生の担任4人がまず授業づくりに取り組んでいったのです」と、当時1年生の担任でSSTを実践してきた赤羽研二先生は語る。

最初に教職員が生徒に期待すること

と、生徒が日常生活で困っていることをそれぞれアンケートすると、教職員からは①相手の考えや気持ちをしっかりと聴く②自分の感情をコントロールする③自分の感情の動きに気づく、という結果が出て、生徒からは①相手の考えや気持ちをしっかりと聴く②自分の考えや気持ちを伝える③自分の感情をコントロールする、といずれも似たような考えをもっていることがわかった。それをもとに、09年度・10年度は年6回、11年以降は年4回、LHRの時間を利用してSST授業が実施されることとなったのだ。

「1年生と2年生を対象にしているのは、そこだけでやればいいというのではなく、2年間かけて学んだことを3年生では日常的に活用できるようにする。つまり、全学年を通じて重要なことで、まさにSSTは学校を挙げてのキーワードになりました」（赤羽先生）

そのため、2年めからは全学年から二人ずつの先生がSST推進委員に選ばれ、事

務局としてSSTを支えている。授業を行

わない3年生の先生たちもSST推進委員として参加することで内容を理解してもらい、日常的に生徒が学ぶ「スキル」を利用しやすい環境を整えることが大切なようだ。

徹底的に模擬授業を行い  
よりわかりやすい授業を目指す

例えば、1年生の1回目の授業は「聴くスキル」がテーマ。その意味をワークシートで考えたり、法政大学の学生によるモデリング（ロールプレイ）で「聴く」とはどういうことを理解していく。指導案やワークシートは授業実施2週間くらい前に渡辺研究室が提供してくれるが、実際に授業を行うのは、担任と副担任の先生たち。特に09年度は初めての試みだったので、毎回、50分授業1コマのために担任・副担任が集まって事前に模擬授業を2〜3回、それぞれに2〜3時間かけて検討しながら準備を進めたという。



SST推進委員  
竹鼻崇浩先生



総合学科学科長  
赤羽研二先生

School Data

1907年創立／普通科、専門科（グリーンライフ科、デザイン科）、総合学科／生徒数335名（男子179名・女子156名）／進路状況（2012年度実績）大学15.3％・短大12.2％・専門学校36.7％・就職30.6％・その他5.1％

「当校の生徒にはもつとこつとしたほうがいいのではないかと、こんな表現のほうが伝わるのではないかと、議論は白熱しました。その内容を渡辺先生にフィードバックし、必要な箇所は修正していただき、授業

SSTの授業計画（テーマ）

	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度
1年生	①聴くスキル ②話すスキル ③感情に気づくスキル ④感情をコントロールするスキル ⑤自分を大切にできるスキル ⑥計画を立てるスキル		①聴くスキル ②話すスキル ③感情に気づくスキル ④感情をコントロールするスキル	
2年生	①自己紹介するスキル ②聴くスキル ③共感を示すスキル ④あたたかい言葉をかけるスキル ⑤謝罪するスキル ⑥計画を立てるスキル		①聴くスキル ②共感を示すスキル ③あたたかい言葉をかけるスキル ④謝罪するスキル	

取材・文／清水由佳



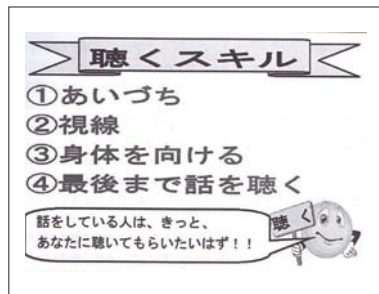
SSTでは、すべての授業に共通して「ソーシャルスキル・トレーニング 5つのルール」を常に板書して意識づけていた。

### ■ ソーシャルスキル・トレーニング 5つのルール

1. 邪魔をしない
2. らんぼうな言動をとらない
3. ひやかさない
4. 全員が参加し、協力する
5. 話し合いを大切に

SSTの授業の際、毎回必ず確認した基本ルール。

### ■ 教室に貼り出していた「聴くスキル」



日常的にスキルを意識できるように、授業の後しばらくは、スキルのポスターを教室に貼り出していた。

4年間を通じて、赤羽先生は手応えがあったと語る。

「まずは、日常のなかで、『あ、今おれ聴くスキルを使うときなんだ』と生徒が自分から口にする場面が始めました。先日も生徒集会で、『今は聴くスキルを使うときは』とアナウンスが流れていました。そして何よりも、私自身、授業中に生徒を注意することが減りました。何か問題行

### 生徒の変化はもちろん 教師の変化に意味がある

に臨んだのです(赤羽先生)

翌年からは、担任として取り組む先生たちが、前年のDVDを見ながら事前勉強を繰り返している。

「予算の都合で現在は年4回ずつの実施になっていますが、なおさら日常でのスキルの定着に向けた、職員全体の理解と意識向上が重要になっていっています(竹鼻崇浩先生)

動を起こしそうになっているときも、『SSTの授業で習ったスキルを思い出して考えてみよう』と言うと、それで収まるが増えました(赤羽先生)

赤羽先生は、授業中に比較的生徒を叱るタイプだと認識している。ところが、SSTの授業では『しちゃダメではなく、〇〇するようにしよう』と、常に肯定の表現を使う。そのため、当初は『先生、今日はやけにやさしいじゃない。普段の授業となんか違う』と生徒から言われたりもしたという。しかし、肯定的な表現をしていると生徒はその言葉に素直に耳を傾ける。しかも、スキルとして学んでいるので、どんなスキルを今使うべきかがわかり、落ち着いた行動をとれるようになってくる。叱らなくても生徒が変化する新しい発見があったという。しかも、落ち着いた言動は、就職指導の場面でも効果を発揮している。

「SSTは、生徒のスキルであるとともに、教師のスキルを伸ばすという意味でも、非常に効果的な授業だと思います。当校か

ら他校へ異動された先生が、先日、他の学校でも使えると言っていました。また、もともとこの授業は学外からさまざまな方が視察にいらつしやるのですが、最近では、高校の教職員からの視察依頼も増えていて、それがとてもうれしいんです。皆でよいものに育てていけるといいと思っていますから」

**実践のポイント**

**SSTの授業だけでなく 日常でいかに使えるかが大事**

◎ 導入に際して大切なことはどんなことだと思いますか？

日頃の授業であれば、毎日少しずつ修正し進めさせていくことができます。しかし、SSTは毎回そのとき限りの勝負。だからこそ、事前の模擬授業はしっかり行い準備することが不可欠です。手間も時間もかかりますが、それだけのことはあると

思いますね。(赤羽先生)

◎ 大学と合同で教材開発をする点で大変だったこと、気づいたことは？

研究材料になるので、授業後のデータ収集がかなり大変だったという印象はあります。毎回生徒1人ずつに関するB4表裏のアンケート(評価)を教師が書かなければいけなくて、クラス40人分をすべて行うのは正直とても大変だと思ったことがあります。でも、それだけやるためには生徒をしっかりと見るようになりますし、考える機会にもなる。何よりも、大学と合同だったので、大学生が教室に来てありがちなコミュニケーションのシーンを再現してくれると、生徒の食いつきが全然違うんです。同じことを教職員がやっても、あそこまで生徒には響かなかつたかもしれませぬ。外部から新しい人が来て、新しい風を運んでくれることは、非常に効果があるということを実感しました。(竹鼻先生)